

## 研究会に参加して

守 永 英 子

五十八年十月三十一日(月)、奈良女子大学文学部附属幼稚園の研究発表会。テーマは「遊びに熱中し、自発的に学習する子供を育てる」。

時節もよく、所も私の好きな古都、テーマも心ひかれるもので、私たちはいそいそと新幹線に乗り奈良に向いました。

学園前駅から数分の附属幼稚園の周囲は、大きな邸宅が並ぶ静かな住宅街、手入れの届いた庭木や生垣の緑が美しく、住んでいる人々の落ち着いた生活を思わせます。

附属幼稚園の門をはいると、敷地約二千四百坪という広々とした園庭が目の前に開け、庭の向う端には、敷地の高低を利用した長いすべり台がしつらえ

てあり、その周囲の斜面は芝生でしょうか、緑が広がっています。まず、明るい、整った環境に好印象を持ちました。

私たちが園についたときは、子どもたちの活動は始まっており、園庭にコースを作って自転車に乗っている姿がみられました。研究会の要項によれば、これは三年保育の四歳児のクラスだったようです。

三、四、五歳の各年齢が二学級ずつ、計六クラス約百六十名の子どもたちが、さまざまな活動を展開していました。二年保育の四歳児クラスと五歳児クラスが、バーババごっこにテーマをしぼっている外は四クラスとも「好きな遊びをしよう」というテーマで、三歳児では、お店やさんのしつらえがあったり、平均台やジャンピングなどで遠足ごっこの雰囲気がつくられている中で、子どもたちがのびのびと好きな遊びを楽しんでいるようでした。「バーババごっこにいる物を作ろう」という四歳児の部屋と、いろいろなゲームを含むいくつかの遊びのコーナーでそれぞれにグループで遊んでいる五歳児の部

屋は、人垣の間から垣間見ました。細かいところまではゆっくり見られませんでした。が、それでも、子どもたちが落ち着いて自分の活動に没頭している雰囲気は感じ取れました。

このような研究会に参加する時の常ですが、クラスに腰を据えてじっくり見なければ、保育は深く見られない”という気持と、やはり”各年齢、各クラスの活動を全部見たい”という気持のはざまで揺れて、結局は後者を選んでしまうのです。

このほか、指揮者のもとに楽器で演奏しているグループがあったり、五歳児では、”バーバパパごっこ”の展開として、木で、子どもたちが出はいりできる程の大きい家を作る活動が行われ、子どもたちが板に釘を打ちつけていました。又、別なグループが平行して、箱舟づくりや、公園づくりをしていましたが、これも”バーバパパごっこ”の一連の活動のようです。

一時間の実際指導の間に、六クラスを見て歩き、しかも大勢の参会者の間から子どもの活動を見て保

育を云々することは、おこがましいことと思います。が、園全体を包んでいるあの落ち着いた雰囲気は、研鑽を積んだ保育者の力と、行き届いた指導が子どもたちの生活の上に結実したものと云えそうです。そして、古いものを大切に今に伝える奈良という土地柄も、人の心を落ち着いたものにすることに役立っているのかもしれない。

今回の研究発表は、五十五年度から始まっている教育課程の改訂をめざした研究と実践の総括だったようです。発表会と同時に、”教育課程 3・4・5 歳児の年間指導計画”という立派な本も出版されました。実際指導のあとは、そこに至る精密な研究の発表と、大阪樟蔭女子大学の名倉啓太郎先生による講評、午後は、国立教育研究所の永野重史先生の、「幼児の自発性と教師の指導」という講演で、盛会でした。私どもも反省したり、刺激を受けたり……明日の保育に意欲を燃やしながら帰途につきました。

(お茶の水女子大学附属幼稚園)